

自由論題報告要旨

1. 森下 勇矢 MORISHITA Yuya（独立研究者）

沈黙の騎士

—『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』における道化の変容—

ヴォルフラム・フォン・エッセンバッハ(Wolfram von Eschenbach, um 1160 - um1220)の『パルチヴァール』(Parzival, um 1200)においては、主人公が愚者の状態から騎士となり、過ちを経て最終的に聖杯王へと至る成長の過程が描かれる。本研究は、アルトゥース宮廷に登場する騎士アンタノールと、その原型であるクレチアン・ド・トロワ(Chrétien de Troyes, um1135-um1185)の『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(Perceval ou le Conte du Graal, 1181-1190)における道化とを比較しつつ、両者の愚者性と身分の差異が物語に与える影響を明らかにすることを目的とする。

宮廷道化は本来、王に対して真実を語る存在であり、ときに予言者としての性格を帯びるが、『ペルスヴァール』の道化が持つこの性質は、『パルチヴァール』においてアンタノールに継承されている。他方で、アンタノールは騎士という「秩序(Ordo)」内部の身分に属しており、この点において道化とは決定的に異なる。彼はクネヴァーレとともにパルチヴァールの卓越性を表明する存在であるが、その「沈黙」ゆえに愚者とみなされ、宮廷秩序の構成員でありながらも、それにそぐわない異質な存在として扱われる。しかし、パルチヴァールの登場とクネヴァーレの微笑みを契機として彼が沈黙を破るとき、初めて周囲の評価は修正され、騎士として秩序に権威づけられた発言が可能となる。この瞬間において、アンタノールは愚者としての立場を喪失し、揺るぎない騎士として再定位されるのである。

アンタノールの愚は、ヴォルフラムが構想するパルチヴァールの愚を象徴的に表現するものであり、アルトゥース宮廷において言語的に未熟なパルチヴァールの愚者性を代理的に担っている。(Haas, 1964) 宮廷社会は彼の沈黙に対して彼を愚者と見なすが、その反社会性と愚者性は、読者にとって物語の展開や主人公の歩む道への深い洞察を保証する徴として機能する。すなわちアンタノールの愚は、パルチヴァールの本質やその後の運命を予見する記号として理解されるべきものである。さらに「賢い愚者(der witzhafte tór)」という表現に見られるように、アンタノールには「賢」と「愚」の統一性が認められ、この内的透過性はパルチヴァールが最終的に到達する在り方を先取りするものである。

アンタノールは騎士でありながら愚者として秩序内部に位置することで、パルチヴァールにとっての師として機能し、その愚は「パルチヴァールへの奉仕」として社会的意味を帯びる。この社会性は彼が騎士であることによって可能となり、道化の身分では実現しえなかった発言の権威づけをもたらす。以上のように、道化から騎士への身分変更は、愚者性に新たな社会的機能と権威を付与し、物語における予言や教育的役割を強化する。アンタノールはパルチヴァールの内的成長を先取りしつつ、その歩むべき道を示す存在として位置づけられる。十二世紀末から十三世紀初頭にかけて、アーサー王物語は宮廷文化の中心的文学ジャンルとして展開し、聖杯物語もまた次第に宗教的・救済史的意味を強めていった。こうした時代背景のもとで、ヴォルフラムはクレチアンの道化的形象を、社会的秩序を担う騎士身分の内部へと移し替え、愚者性に予示的・教育的機能と権威を与えたのである。

アルフォンソ 10 世『豪華写本』挿絵における「鷹狩り」

アルフォンソ 10 世賢王は、在位中、数々の書を編纂させたが、その中で唯一ガリシア・ポルトガル語韻文の『聖母マリア頌歌集 *Cantigas de Santa María*』(以下、『頌歌集』)は、王の極めて私的な書であり、楽曲と歌謡が巷間に流布したのに対し、エル・エスコリアル修道院図書館蔵『豪華写本 *Códice Rico*』(T-I-1)挿絵は一般の目に触れることはなく、美術史的評価も高いとは言えなかった。しかしながら、つぶさに観察すると、挿絵に付されたキャプション配置、コマ割りの工夫から、極めて精緻な人物の表情や動き、巧みな物語展開を実感することができる。発表者は、コマ割りや画面転換の工夫に着目して、写本制作の主体が、韻文作者から画家自身にゆだねられていき、主客転倒して挿絵が独自に展開していった可能性を指摘した(「スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会」2024)。さらに、『頌歌集』というタイトルから、聖母賛歌に終始した写本と思われがちであるが、聖職者の性的放縦や修道女の恋などが赤裸々に語られる点で(浅野ひとみ『『聖母マリア頌歌集』における赦しの聖母マリア—カンティーガスにみる聖職者の破戒—』2023)、宮廷人の「笑い」の要素を指摘する研究者もいるが、発表者は、教皇党と皇帝党の対立の反映を読み取る A.ドミンゲスの解釈("La miniatura en la Corte de Alfonso X", 1992)を支持すると共に神聖ローマ皇帝を希求し続けたアルフォンソ王の宗教者に対する痛烈な批判が表されていると考える。

当該写本研究においては、様々な切口を提示することができようが、本稿ではフリードリッヒ2世の『鷹狩りの書』(BAV. Pal.lat.1071)挿絵から『豪華写本』挿絵への様式的影響を論じる。

また、「鷹狩り」は王侯貴族の嗜みにとどまらず、騒乱の合間に次の戦に備える意味があり、キリスト教的文脈では七大罪の一つである「奢侈」や「嫉妬」の象徴として用いられている。さらに、『頌歌集』では失った鷹をサーラスの聖母(ウエスカ)のご加護によって取り戻す男の話(CSM 44)が取り上げられており、一人前の鷹匠になるには「鷹への愛情」が不可欠であると指摘する中世アラブ世界の『鷹狩全書』の伝統(飯塚七海「中世アラブ世界における鷹狩り—『鷹狩全書』(Kitāb al-Kāfi fī al-Bayzarah)』第三章を中心に—」2019)をも見出すことができる。

以上のように、『豪華写本』における「鷹狩り」は翻訳を通じてイスラーム文化が西洋に流入し、宗教的枠組みを超えて協働成果として昇華したアルフォンソ宮廷文化のすぐれた一面を示す好例と言えるだろう。

「神学」の位置付けと「神学者」の位置付け

—トマス・アキナスからギヨーム・ド・ピエール・ゴダンまで—

トマス・アキナスによる神学の「下屬する学知」説は、M.-D. Chenu 以降、信仰に基づく神学とアリストテレス的学知の両立を巡る問題の一つの解決として注目されてきた。実際、13世紀以降、聖書釈義とは区別され、アリストテレス哲学と結び付き、討論を中心とした「神学」が発展する中で、トマス以降の神学者たちによる神学の地位を巡る議論は、信仰と理性の関係を巡る議論の一環として、特に1277年の禁令や、大学内での神学部と学芸学部との対立の中で、「神学」の認識論的地位に関する問題として主に注目されてきた。それに対し本報告では、トマスの後、ガンのヘンリクス以降、この議論は大学における「神学」の学問的位置づけの問題に留まらず、教会における「神学者」の救済論上の位置付けの問題と結び付いて発展したことを明らかにする。

まずトマスにおいては、「神学者」の地位を巡る問題は明示的に扱われないものの、「聖なる教え」は神と至福者たちの知に下屬するものとして、学知としての地位が主張される。しかし、それは原理としての信仰箇条に対する信仰に基づいて得られるものであり、単なる信徒とそれ以上の認識を持つ者との差異は、明白な信仰と暗黙の信仰という信仰の完全性の違いに基づくものであった。

一方、ガンのヘンリクスは、「神学者」には、天上での至福直観の光には及ばないものの、一般信徒が有する信仰の光と理性の光に加えて、知解をもたらす別個の光が与えられると主張した。これにより「神学」は、信仰を超えた学知としての地位を獲得すると共に、それを可能にする恩寵の存在を主張することで、「神学者」は教会内において、他の信徒たちよりも上位の地位を与えられることになった。

これに対しフォンテーヌのゴドフロワは、信仰に加えて与えられる光の存在を否定し、「神学者」が有する知識の優位性を、同じ信仰の枠内での照明や調整の度合いの違いに求める。「神学」には、信仰に基づく主観的な固執の確かさは伴うものの、認識上の確かさは学知には及ばない。したがって「神学者」は信仰の光に基づきつつ理性による学究を通して得られる聖書についての知識を持つに過ぎないものとされ、信仰を前提とすれば、学究によって「神学」を学ぶ道が誰にでも開かれることになる。

ドミニコ会士としてトマス擁護を行ったパリのヨハネスとギヨーム・ド・ピエール・ゴダンも、明示的にこれらの論争に参入した。彼らはトマスの下屬説を引き継ぎ、「神学」の認識上の確かさに関しては厳密な学知であることは認めないものの、逆に他の厳密ではない学知の存在を取り上げることで「神学」の地位を確保した。その一方で、彼らは「神学者」が信仰の光と理性の光に加えて新しい光を受け取ることは否定し、教会内でのエリート的な地位の主張は退けている。

このように、ヘンリクス以降、神学を巡るパリでの議論においては、「神学」の認識論的地位を巡る議論は、それを有する「神学者」の教会における恩寵上の地位を巡る議論と結び付くようになった。そこでは、信仰と理性の対立を超えて、むしろ信仰と理性の上に、「神学」および「神学者」に固有の更なる段階を設けるべきかが問題となったのであり、本報告で扱う神学者たちに続く世代の議論についても、この延長線上で捉える必要があるだろう。

カテキズムの変容と読者層

—アビンドンのエドモンド『教会の鏡』から『信者の覚書』へ—

中世のキリスト教教化文学を構成する要素のひとつとして、カテキズムの解説がある。教皇インノケンティウス 3 世が公布した第 4 ラテラノ公会議(1215 年)の教令(21 条)によって、男女問わず全てのキリスト教徒が、年一回、教区司祭に対する罪の告白を義務付けられたことを機に、13 世紀から 15 世紀にかけて、魂の救済を担う教区司祭の教育のみならず一般信徒も対象とした司牧に関する手引書がラテン語と俗語で数多く編纂された。とりわけイングランドにおいては、カンタベリー大司教ジョン・ベッカムが、通称「聖職者の無知について」と知られるランベス司教令(1281 年)において、14 の信仰箇条、十戒、7 つの慈善行為、7 つの罪源、7 つの美德、7 つの秘跡などを一般信徒に解説すべき項目として定めた。その後、英語によるコンピラティオやラテン語あるいはフランス語からの翻案なども増加し、手引書の対象が聖職者であるかあるいは一般信徒であるかによってカテキズムの記述に変容が認められることから、その編纂過程を解明するためにも読者層に注目することが肝要である。

アビンドンのエドモンド(1174 頃–1240 年)が著した『教会の鏡』は、ラテン語(*Speculum religiosorum* と *Speculum ecclesie*)、アングロ・ノルマン語(*Mirour de Seinte Eglyse*)、そして中英語(*Mirror of Holy Church*)のヴァージョンで多くの写本が現存する。自己認識のための黙想から神を知るための観想へと至る修道院での生活理念の解説が軸となるが、カテキズムの教化的な要素も取り入れた実践的な信仰の手引書である。主な読者層は律修聖職者であると考えられるが、ヴァージョン間の著しい改変から、近年の Watson、Gunn らの研究では、一般信徒も含めたより広い読者を念頭に置いていたことも議論され始めている。

『信者の覚書』(*Memoriale credencium*)もまた、基本的なカテキズムに加えて、黙想と観想についても解説した中英語の包括的な手引書であり、10 点の写本(完全版は 4 点)が現存する。14 世紀末に一般信徒の読者を想定したコンピラティオとしての性格が強く、パグラのウィリアム『司祭の目』(*Oculus sacerdotis*)、チョバムのトマス『告解大全』(*Summa confessorum*)、ペナフォルトのレイムンド『改悛諸項大全』(*Summa de poenitentia*)、グイレルムス・ペラルドゥス『悪徳と徳に関する大全』(*Summa de vitiis et virtutibus*)、そして『教会の鏡』などのラテン語テキストを主な典拠とする。Kengen による校訂版(1979 年;底本はボドリアン図書館 Tanner 201 写本)が刊行されているものの、その後の研究は皆無に等しい。

本報告では、『信者の覚書』が『教会の鏡』を基にした「黙想と観想」のセクションから、7 つの秘跡を取り上げ、2 つのテキストにおけるカテキズムの変容が読者層を意識したものであることを明らかにする。『教会の鏡』については既存の校訂版を用いるが、『信者の覚書』は報告者が準備中の大英図書館 Harley 2398 写本を底本とした批判校訂版を使用する。テキスト校訂の過程で浮かび上がる、中世後期イングランドにおけるカテキズムの教化プログラムの変容の一例を提示したい。

なぜネブリハは中世の文法書 *Doctrinale* (1199) を否定したのか？

—『ラテン語入門』(1481)との対比を通じて—

ルネサンス期スペインの人文主義者アントニオ・デ・ネブリハ(1444-1522)は、1492年に自著『羅西辞典』(*Lexicon ex sermone Latino in Hispaniensem*)の序文で「私が最初にラテン語の店開きをし、イスパニア全土から *los Doctrinales* <中略> を根絶した」と述べ、自らが企てたラテン語教育改革の成功を公言した。ここで引き合いに出された *Doctrinale* (『文法学綱要』と訳されることもある)とは、1199年頃にノルマンディー出身のアレクサンデル・デ・ヴィラデイによって編まれたラテン文法書で、ドナトゥスの *Ars Minor* を読み終えた中級学習者を対象としたものである。暗記術を重視するあまり全 2645 行の韻文で書かれているのが特徴で、13 世紀以降、瞬く間にヨーロッパ各地の教育機関に広まり、パリ、ボローニャ、サラマンカなどの主要大学における必修カリキュラムの教材として約 300 年間継続的に使用されるまでになった。ネブリハは大学におけるこの教科書の継続使用を否定し、その対案として 1481 年に上梓したのが『ラテン語入門』(*Introductiones latinae*; 以下、*IL*)だった。彼は処女作である *IL* をはじめ、自著のいくつかで *Doctrinale* やその他の中世に作成された文法書を悉く批判しているが、具体的にそれらの何が問題なのかについてはどこにも明記していない。その点の分析こそが *IL* の執筆動機を明らかにするために不可欠だと思われるが、この種の先行研究は見当たらない。

本発表では、*Doctrinale* が出現した背景を踏まえたうえで、なぜネブリハがこの韻文による文法書を否定したのかについて検討する。*Doctrinale* と *IL* の間に見られる文法記述を具体的な項目に絞って対比をしてみると両者の違いが浮かび上がり、ネブリハの目論見に接近することができる。その目論見とは、1)暗記重視型から参照重視型への転換、2)無駄をそぎ落とした簡潔明瞭な記述法、3)古典期のラテン語に実例を求める実証重視の姿勢などである。また、*IL* の第 2 版(1485/1491)および決定版となる第 3 版(1495)にも目を向けると、*Doctrinale* の否定理由となるさらなる手掛かりを探し出すことができる。ところが興味深いのは、彼の弟子にあたるグティエレス・デ・セレスという人文主義者が、*IL* 出版の 4 年後に *Doctrinale* のアップデート版とも呼べるラテン文法書を出版している点、そして *IL* 第 2 版と第 3 版においてネブリハ自身が文法記述の一部に韻文を採用している点である。ルネサンス期になってもなお、ネブリハの思惑とは裏腹に韻文による暗記術の定着は依然として根強く、ネブリハといえども教育現場における暗記重視の伝統を容易に打破できなかった様子が窺える。こうした史実に鑑み、中世的な *Doctrinale* とルネサンス的な *IL* という両文法書の間には、断絶のみならず連続性が部分的ながら見出されることについても指摘したい。本発表で対象とする各文法書の分析と対比を通じて、ネブリハが目指した言語教育思想の一端を浮き彫りにするのが最終的な目的である。